

愛で表される信仰

皆さん、おはようございます。私が最後に OIC に来たのは約 25 年前になります。90 年代初頭、幼い子供達を連れて私と家族は 2~3 年間、ここに通っていました。今でも、私の親友であるドン・カドゥーアさんやデイブ・テイラーさんなど、生涯の友となる人たちに初めて出会ったのは、OIC でした。OIC の創設者であるジャック・マーシャル牧師や DMI の創設者であるネビル・ミューア氏に出会ったのもこの場所でした。ここに帰ってくる事ができて、とても光栄です。お招きいただき、ありがとうございます。今朝は、神さまは、ご自身の子どもたち一人ひとりを愛し、いつも語りかけておられるという素晴らしい真実をお伝えすることから始めたいと思います。私が今からお話する神と私たちの関係とは、比喩的だったり漠然としたことではなく、力強く、ダイナミックで、親密な関係のことを指しています。神様は、おもに聖書を通して明確に私たちに語りかけてくださいます。また、この世界や人々などと言う、神の創造物を通してだったり、聖霊の促しを通してだったり、個人個人に対する啓示を通してだったり、時には夢を通してだったり、そして仲間のクリスチャンの言葉を通して、神は、私たちに語りかけてくださいます。現在私は、DMI 国際ろう者支援協会働いています。今日は DMI で働く者として、神がどのように私に語られたかについてお話ししたいと思います。まずは、聖霊の促しを通して、そして次に、聖書の素晴らしい言葉を通して神が私に話して下さったことを、今朝の私の証言として、皆さんと分かち合いたいと思います。2 年ほど前のことです。ある朝、私が、髭を剃っていると、主の御言葉が頭に浮かんできました。皆さんきっと、ひげを剃っている時に御言葉なんて、おかしいなと思われるでしょう。なぜかは分かりませんが、私は髭を剃っているときに、よく神からの言葉を聞くことができます。朝の祈りの時間のすぐ後にひげを剃るので、それも関係しているのかもしれませんが。その時、もちろん聞き取れるはずはありませんが、主ははっきりと「アンドリュー、あなたは DMI(Deaf Ministries International) 国際ろう者支援協会働くべきだ。」と言われるのを聞いたのです。それはとても唐突に、まるで光がパッと照らされたような感じで聞こえたのです。私は、この神の言葉にとっても興奮しましたが、同時に不安もありました。「でも一体、何をすればいいのだろうか？」と、私は当惑しました。当時、DMI の責任者だったネビルさんに連絡して、「ネビルさん！神は一体、私に何を言ったと思いますか？」とでも言えればいいのだろうか？もし、神がネビルさんに、同じように伝えていなかったらどうしよう？と、あらゆることを考えました。

そんな私の DMI 国際ろう者支援協会に対する考えを、日本にある DMI の責任者であるエレイン・マドールさんに相談したところ、ネビルさんに直接連絡を取り、私の心の中に感じたことを全て共有するようにと勧められました。私は、神が DMI 国際ろう者支援協会のことについて私の心に伝えたとおりに、「DMI の将来的な展望、すなわち、ビジョン・ステートメント」という提案書のようなものを作成し、ネビルさんに送りました。今、振り返ってみると、その時の私の DMI の未来に向けての計画は、かなり大胆な提案でしたが、それは私の心を奮い起こしてくれるような考えだったのでした。

その当時のネビルさんの返事をそのまま読みあげます。ネビルさんは私にこう言いました。「アンドリュー、あなたの提案書を読みました。私は興奮して息ができないほどでした。あなたの提案の多くは、私たちがまさに必要だと感じていたことであり、私たちがこの数週間、オフィスでのミーティングで話し合ったことでもありました。あなたのアイデアや提案は、私たちにとって、とても励みになり、このような偶然が実際に起こるなんて信じられない思いです。」と、ネビルさんは言ってくれたのでした。そのような返事をネビルさんから聞いたことは、私にとっては DMI に対する強い確信となったのでした。

話が長くなりましたが、それ以後、ネビルさんの健康状態が悪化した昨年 7 月、私は DMI オーストラリアのコーディネーターの役を引き受けることになりました。そしてつい、2 週間前には、インターナショナル・コーディネーターに任命されました。そのことはとても喜ばしいことです

が、実は、私の手柄ではないのです。それは、神の御心と熱意の賜物です。DMI では、現場の働き手や学生たちが、毎日多くの困難に直面しています。しかし、どのような困難があったとしても、神さまに召された場所で奉仕できることは、私たちにとって純粋な喜びとなります。

残念なことに、ネビルさんは昨年 11 月に長い闘病生活の末に亡くなってしまいました。ネビルさんが亡くなる前、私は彼と一緒にアジア各地の教会や学校を訪問する機会に恵まれました。私は実は、旅をすることは少し不得手なのです。ベッドもない土の上で寝るのも、水道のない生活も苦手ですし、旅先では、好き嫌いが多くてほとんどの食べ物が食べられません。そのような不便さを感じながらも、私は海外での DMI の活動が大好きなのです。子供たちやスタッフ、牧師やその信者たちに会うのが楽しみで、私が書いているブログのために DMI の学校の、ろうの生徒達にインタビューしたり、彼らをもっとよく知ることが楽しみでなりません。

今回は、私が出会った数多くの、素晴らしい、ろうの人々のうちの、一人をご紹介しますと思います。これはカーン・ルンさんです。彼女はビルマ人で、ミャンマーにある DMI の、ろう学校に通っています。私が出会った時、彼女は 13 歳でしたが、学校での学年は小学校の 1 学年でした。というのも、彼女は学校からとても遠くに住んでいたため、12 年間もの間、ろう学校があることを知らなかったのです。そのため、彼女は生まれてから 12 年間、教育を受けることもなく、人生の目的や希望もなく、何も聞こえない静かで、孤独な世界で生きていたのです。彼女は、それゆえに常に寂しく孤独で、いつもイライラしていたのです。そして彼女は私に、以前は、ろう者であることがとても嫌だった、と言いました。

しかし、この学校に来てから、カーン・ルンさんは手話を学び、勉強にも励み、友達を作り、自分が属するコミュニティを見つけ、キリストへの信仰を見出したのです。そしてまた、彼女は私に、今では耳が不自由で良かったと思う、と言ったのです。

私は、彼女が「ろう者でよかった」というような話を聞いて、もちろん最初は信じられませんでしたが、ですから、率直に次のような質問をして聞き返してみました。私は、彼女に、「もし、耳が聞こえるようになる薬があったら、聞こえるようになりたいですか?」と聞きました。すると彼女は「いいえ」と答えました。そして「とんでもない。治りたいとは思いません。」とまで言い、その理由を説明してくれました。彼女は、「もし自分の聴力が治ったら、この学校や教会を去らなければならなくなります。このコミュニティは私にとってすべてなんです。」と言いました。その時、私は本当の真実に気づきました。カーン・ルンさんは聴覚を得ることよりも、愛を必要としているのだということに気づいたのです。

カーン・ルンさんが求め感じた、そのような愛は、大きな意味を持っています。キリスト教の愛は、最も大きな愛で強い愛なのです。神を愛し、隣人を愛するというように、聖書にある 2 つの最大の戒めの中心となっているのは「愛」です。コリント人への第一の手紙の中で、キリストの体、霊的賜物、神の力についての教えの最中（さなか）に、パウロは、はるかに重要なことに気づき、突然話を中断し次のように語っています。

コリント人第 13 : 1-3 「13:1 たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐺鉢と同じである。2 たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。3 たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。」

人は心の奥底では、才能や能力を求める気持ちよりも、愛をはるかに強く求めているのです。それどころか、たとえそれらの信じられないほどの貴重な賜物や聖霊の現れや行いがあっても、愛がなければ意味がないのです。しかし、この聖書箇所では、パウロは、私たちがどんなに強い信仰を持ち、大きな犠牲を払って生きていても、愛がなければ賜物や聖霊の働きが少し弱まるのだとか、働きの効果が薄れるのだとか、賜物や聖霊の働きが損なわれたりするのだ、とは言っていないことに留意してください。パウロはそのような中途半端な言い方はしていません。パウロは、

愛に基づいて行動しなければ、私たちが得るものは何もない、「いっさいは無益である」と言っているのです。パウロはまた、私たちの存在でさえ「無に等しい」と言っています。

これは身につまされることであり、私達はこのことをさらによく考える必要があります。また、パウロは誇りに満ちて、「霊的な賜物を使うこと」、「信仰によって山を動かすこと」、「持っているすべての持ち物を貧しい人たちに与えること」などについて語っています。しかし、ここでパウロが言っている『愛がなければ』と言う教えは、私達の日常生活の小さな出来事にも当てはまるのです。このようなパウロの『愛を持って行動しなければならない』と言う教えは、私達の生活に当てはめると、次のように言い換えることができるので聞いてください。

例えば、

『もし、私が、美味しくとても健康的な食事を家族に調理しても、それを嫌々、愛情なしに作っていたら、何の意味も持たないでしょう。』

『もし、私が毎晩、子供たちの宿題を手伝ったり、子供を寝かしつけたりしていても、それをめんどくさそうに愛情もなくやっていたら、私のしていることは子供たちにとって何の助けにもなっていないでしょう。』

『いくら私が、毎日一生懸命働いて家族が豊かに暮らせるようになったとしても、自分の稼いだお金で一生懸命慈善事業をしたとしても、仕事や家族や友人に対して不満を抱いていた、恨みを持っていたりしたら、私が得ているものは何もないでしょう。』

と言うようなことが、あなたの日常に当てはまって言えるのではないのでしょうか？

クリスチャンの愛は強力です。愛は偽ることはできません。しかし愛は誤解されることがあります。愛は人生の源であり強力なものであるにもかかわらず、愛がいかにも誤解されているかというのは、驚くべきことです。だからこそ、この第一コリント 13 章では、パウロが「愛とは何であるか」、また、「何が愛ではないのか」について次の 7 つのことを教えてくれています。

愛とは、忍耐強く、優しく、守り、信頼し、希望を持ち、根気強く、真実を喜ぶことです。愛とは、うらやんだり、自慢したり、名誉を汚したり、自分のために求めたり、すぐに怒ったり、赦さなかったり、高慢になったりしません。

一体どのように、これらの愛と愛でない定義を混同することができるのでしょうか？愛を理解するのはそれほど難しいことではないはずです。私たちは、「神聖なる欲求」という言い訳の下（もと）で、自分の羨望を正当化することができます。私たちは、「自己管理や自己愛」という名の下に、自己中心的な考えやプライドを持つこともできます。「健全な自尊心」という名の下に、自惚れたり、自慢したりすることができます。「愛があるから厳しくする。規律を与える。正当な怒りである。」と言う理由の下に、人々は、他人の名誉を傷つけてしまったり、許すことができず怒りをあらわにしてしまうことがあります。

しかし、クリスチャンの愛は、今まで挙げたどの例にも当てはまらないはずで、クリスチャンの愛は、忍耐強く、優しく、守り、信頼し、希望を持ち、根気強く、真理を喜ぶものです。このような性質はどれもが、それぞれに説教にて、しっかり説明されるべきですが、今日は最初の特質である「忍耐」だけに触れてみましょう。そうです。忍耐。愛は忍耐なのです。私がこの点に注目したのは、「COVID 19、新型コロナウイルス」のおかげです。パンデミックの渦中で、みんなの忍耐力が試されているように思います。私たちは新型コロナウイルスにうんざりしていますよね。このウイルスによってもたらされた、生活の制限や、混乱に、もう、うんざりしていませんか？私たちの今までの人生計画は COVID19 に台無しにされてしまいました。ある家族は引き離され、場合によっては崩壊させられてしまった家族もいるでしょう。

しかし皆さん、我慢してください。忍耐してください。皆さん、お互いに愛し合うことに疲れないうでください。特に、このキリストの体である教会の中では、COVID19 の感染対策によって取らなければならない距離や、その他の制限によって、お互いへの愛情が薄れてしまわないように気

をつけましょう。皆さん、どうか、ズームミーティング、電話での祈り、メールでのやりとりを続けてください。どのような形であれ、一緒に会うことをあきらめないでください。どのような形であっても、お互いを思いやる気持ちを持ち続けてください。COVID 19に悩まされていても、COVIDに悩まされているからこそ、忍耐によって、今、愛が最も強く輝く時となるようにしましょう。そうです。愛は忍耐なのです。

パウロはコリント人への第一の手紙13章の最後に、「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。」と述べています。これを読んで、パウロがそう書いたのは、信仰と希望は一時的なもので、愛は永遠に続くものだからだと考える人もいます。しかし、パウロがここで愛がいかに優れているのかを宣言しているのはそのためではありません。愛が最も優れているのは、信仰と希望が愛によってのみ働き、愛によってのみ自分たちを表現することができるからだと言っています。愛がなければ、他の二つである信仰と希望は何の役にも立たないということなのです。パウロはそのことを、この箇所で説明しているのです。

ヤコブは、聖書の彼の手紙の中で、愛の大切さについて語っています。ヤコブの手紙2章には「困っている兄弟を見ても助けられないなら、行いを伴わなければ、それだけでは信仰も死んだものである」と書かれています。いくら復活への『希望』を他の人と分かち合っても、その人の世話を実際にしないなら、あなたの『希望』は死んでいるということなのです。愛は、あなたの信仰と希望を証明してくれるのです。ヤコブは、「人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない。」とヤコブの手紙2章24節で述べていますが、これは『私達は何もしなくても恵みによって救われている』のだと言うパウロの教えと矛盾するものではなく、パウロの言っていることを説明するものなのです。ヤコブの手紙2章26節には「霊魂のないからだは死んだものであると同様に、行いのない信仰も死んだものである。」と書かれています。

ここで、再びDMI、国際ろう者支援協会の活動の話に戻りましょう。今までお話ししたように、福音を説くだけで、何の行動も起こさないのであれば、私たちの教えも、私たちの信仰も無駄になってしまいます。つまり、そのような信仰は『死んでいる』のです。しかし一方で、行いをすれば良いのであれば、人道的な援助をするだけで良いのか、ということでもありません。物理的な支援をしてあげるのは親切なことです。私たちの人生には食べ物や衣服以上のものが必要なのです。人々が何よりも必要としているのは、キリストを知ることなのです。人々に物理的にパンを与えても、命のパンを与えないというのは、恐るべき見落としなのです。

パウロはこの『信仰』と『愛』の組み合わせを非常に簡単にまとめてくれていて、ガラテヤ人への手紙5章6節で「尊いのは、愛によって働く信仰だけである。」と書いています。このように、信仰と愛の組み合わせは不可欠なのです。なぜなら、今までお話ししてきたように、愛のない信仰は死んでしまいますし、信仰のない愛はただ優しさを競うことになってしまうからです。

イエスが愛について語られた時、神への信仰に結びつけて語られました。イエスが赦しについて語った時、私たちと神との関係に結びつけて語られました。イエスが平安について語った時、神と神の子としてのご自身のアイデンティティに結びつけて語られました。クリスチャンの愛は、神への信仰と切り離すことはできません。私たちクリスチャンにとって愛とは形だけのモラルではありません。キリスト教の愛、つまり私たちの中にあるキリストの愛とは、肉体と魂にとっても深く影響を与えるので、人生を変えるものとなるのです。愛は大きな犠牲を払うもので、人々の人生に大きな変化をもたらします。しかし、この人生を左右するような愛は、自然に生まれるものではありません。人の人生に影響を与えるような愛とは、聖霊の実なのです。そして、聖霊の実である愛が、私たちの人生の中で、力強く豊かに成長するとき、それは一層強い愛となります。だからこそ、パウロは、『ただ、あふれる愛のもとで信仰が育まれることが大切なのです』と言っているのです。

DMI 国際ろう者支援協会はこのような愛を実践しています。信仰を育くんでもらうために、発展途上国でろう者のために 180 の教会を設立し、実践的な愛を示すために何十もの学校や職業養成学校を設立したり、雇用プロジェクトを立ち上げ、他の学校ともパートナーシップを結んでいます。今挙げたこれら、教会や学校の設立、職業訓練や雇用プロジェクトなどの活動は、通常、一つの同じコミュニティの中で共に行われています。私たちがこのような活動を行っているのは、愛を持って信仰を見せようとしているからです。そして、そのような愛のある信仰が、多くの人々の世界を変えているのです。

今日は、ここで聞いてみたいと思います。皆さん。愛の中で自分の信仰をどのように成長させることができるのか考えてみませんか？愛をどのように表現することができるのかと言うことを、祈りを込めてもう一度考えてみませんか？そう考えたら、もしかしたら皆さんも、私たち DMI と一緒に活動することに導かれるかもしれません。または、あなたが、すでに奉仕しているミッションに、そのように考えてみることで、愛で信仰を表すことができるように導かれるかもしれません。または、愛をもって信仰を表すということを考えることで、あなたは、全く新しい分野での奉仕活動を行うように導かれるかもしれません。皆さん、聖霊に導かれてください。あなたが今日、私の話を聞いてどう思ったかわかりませんが、うなずきながら「いいこと言いますね」と言って、何も反応せずに帰ってしまわないでください。今日は、どのように愛をもってキリストへの信仰を表現できるのか、またどのように自分の『愛による信仰』を見直すことができるのか、祈りながら皆さん、考えてみてください。

祈りましょう。